

め侍りぬ。

登り來し老の坂より見かへればむかしはながき山路なりけり

于時明治三庚午仲秋

花都東山麓元町 矢野氏於閑居書之

竹本長尾太夫 藤原久富書判

以上の記述、さすがに天王寺村七千五百石の大村長だけ、一見識を持ち學才の程も偲ばれる。殊に長門太夫との師弟の情誼の濃やかさ、一面熱情家としての面目の躍如たるものが窺へよう。

二 學匠長門太夫（四代目）

淨瑠璃大系圖の著者

名門は名將を生む。即ち三世長門の甥、登茂太夫、實太夫を経て、先長門歿後四代目となる。大阪高麗橋に生れ、後新町九軒の東に住む。文化十一年生れ、明治二十三年十月二十三日に歿す。七十七歳。

明治十一年の正月に文樂の櫓下になつて、十九年に退座した。櫓下の榮冠を被つた時の語り

場がなんと、千本櫻の序切、序切の櫓下はこの人だけ。

技藝の方はどつちかといふと第二位であつたが、名門で古老であるのと、斯界の識者として非常に人望のあつたところから、さういふ點で櫓下には恰好の人であつた。

暇さへあれば旅行をして、同業者の墓碑を探つたり、調査癖があつて、何かと斯道のことを調べてゐた。その結晶が淨瑠璃大系圖二十二卷といふ大作になつた。これは美しい丁寧な筆蹟の實寫本で、太夫、三味線、人形遣ひの傳記から、系統、生歿地、年月、本名、本業、墓碑銘、その精密を極めた模寫圖、語り物年表、門弟等、驚くべき精密を極めたものである。これより以前に前記した如く三代目竹本筆太夫にも此種の著述が三冊あるが、それはとても比較にならぬほどの大著述である。こんな大著書を作り上げた人は藝苑他に類がないことで、その多年の苦心奮勵は特筆大書の價值がある。此書の全部は同翁から亡父が譲り受けて現に私の家に傳はつてゐる。又多くの珍書淨瑠璃道の記録など山のやうに蒐集した、稀有の蒐集家、優れた考證家でもあつた。